

その夏、
錆びたトタン屋根のうえで

北村
想

登場人物

まさ子（小谷まさ子、30歳前後）

秀和（神田秀和、アパートの住人、30代半ば）

富子（目黒富子、大屋の息子の嫁、30代半ば）

目黒（目黒浩一、大屋の息子、実質的アパートの管理人、32〜3才）

島田（島田五郎、アパートの住人、30歳前後）

三沢（三沢君子、アパートの住人、45〜50歳）

遠山（遠山金太郎、アパートの住人、40歳前後）

若い男

若い女

良子（遠山の亡き妻）

ゆり子（秀和の妹、20代半ば）

古いアパート。西日のあたるトタン屋根。

南側に物干し台があるらしい。

若い女がひとり、屋根の端っこに膝を抱えて座っている。

女 (じっと空を睨んでいる)

遠くに「まさ子」と呼ぶ男の声。

女 (それには耳を貸さずにただ、空を見ている)

男の声 (声が近づいて来る) まさ子、いるんだろ。まさ子、何処だ、まさ子。

やっと男の姿が物干し台に見えた。女よりは少し年令が上に見える。

男 まさ子、(女があんまり屋根の端にいたので驚いて) 危ないじゃないか、何してんだ、

そんなところで。まさ子、まさ子。聞こえてんのか。

まさ子 あの雲、なんて名前。

男 えっ

まさ子 あれよ。

男 どれ、

まさ子 あれ。

男 え、どれだって(探してみる)

まさ子 あそこ。ほら、金太郎みたいにみえる雲。

男 金太郎、何処、金太郎、金太郎のナニ。

まさ子 (雲を見るのをやめた) 金太郎のキンちゃん。

男 (空から視線をまさ子にもどして) 何、いつてんだよ。おまえ、危ないよ。落ちたらどうする。

まさ子 (コトバ遮って) ここから落ちたら死ぬかな。

男 怪我するよ。怪我はする。絶対。

まさ子 ねえ、あんたさあ、私がここから飛び下りたら助けてくれる。

男 助けるって、えっ、どういうふうに？

まさ子 助けるのは、助けるよ。

男 いいよもう、ともかく、こっちへ来いよ。

まさ子 下でさ、受け止めるとか。

男 何で、俺にそんなこと出来るの。

まさ子 するとは限ってないけど。

男 何で、こんなところでそんなこというの。

まさ子 いったみただけ。ねえ、秀和さんもこっちおいでよ。

秀和 何で。

まさ子 来ないの。

秀和 行ってもいいけど、だいたい何でそんなところに居るんだ。

まさ子 ここね、いいよ。

秀和 いいって、何が

まさ子 何が、何で、何が、何で、・・・あなた、それしかいうことないの

秀和 あのね、知ってるだろ、ここから落ちた人、いるんだから。

まさ子 ふーん。

秀和 だから、ここのアパートの人で、洗濯物干してて、ぼんやり屋根の上に出て、そい

で空を見ているうちに落ちた人。そういうひといるんだよ。

まさ子 寝た。

秀和 えっ。(妙に狼狽する)

まさ子 あなた、寝てたでしょ、さっき。

秀和 (ほっとしたように) ああ、寝てた。目が覚めたら、まさ子いないから。

まさ子 捜しに来たの。

秀和 ああ。

まさ子 心配になった。

秀和 まあ、そういうわけじゃないけど。いや、そういうことで。

まさ子 あなた、sexの後、必ず寝るね。

秀和 そうかな・・・そうだな、少し寝るな。

まさ子 私の部屋でも寝てたわね。

秀和 そうだったかな。

まさ子 ここ、けっこういいアパートね。

秀和 何いってんだよ。ひどいアパートだよ。今時、トタン貼りの屋根アパートなんてないよ。それにさ（しばし黙って）暑いな。ひどく暑いじゃないか。もうもどろろよ。

まさ子 私、この屋根、好きだわ。

秀和 （屋根を覗いているが）ともかく、暑いよ。危ないし。

まさ子 暑いのが好きなのよ。こうしていると、汗が身体中から吹き出てくるし。じわじわと滲み出てくるし。とてもいい気持ちだし。

秀和 それならサウナでも行こうか。

まさ子 違うのよ。カラダがね、カラダだってワカルよ。汗が出て、カラダがカラダし
てることがよく分かるの。気持ちいいわ。ワカラナイ。

秀和 ワカル、けど。

まさ子 （立ち上がって、少し眩暈にふらついた）

秀和 （駆け寄って）あ、危ない。言わんこっちゃない。

まさ子 大丈夫よこれくらい。

この時、赤ん坊を背負った、能面のような表情の女が現れた。もう夕方近いから洗濯物を干すわけではないだろう。

秀和はまさ子を抱きよせたまま、女の方をみて軽く、会釈した。

女は仏頂面のまま、二人を覗いている。

秀和 暑いですね。

女 （秀和を覗いている）

秀和 風がナイからここも暑いですよ。でも、日が落ちれば、涼しくなるかも知れませんね。（などと体裁を取り繕っている）

女 （無言で引き上げた）

まさ子 誰。

秀和 大屋さんの息子さんの嫁さん。

まさ子 まだ若い人ね。なんてひと。

秀和 たしか、富子さんだったかな。

まさ子 富子、古臭い名前。お富さん。

秀和 そうだね。

まさ子 ここに住んでんの？

秀和 離れに居る。

まさ子 どうして、こんなところへ顔出したのかしら。

秀和 さあ、洗濯物を干しにじゃないのか。

まさ子 こんな夕方にかね、きみ。

秀和 ええつ、あれじゃないの。取り入れにさ。

まさ子 干し物なんてあったかな。

秀和 だから、よくワカラナイけど。まさ子、おまえだって、ここへ何しに来たのか、い
わないじゃないか。

まさ子 私はただ、あんたが寝てるから、退屈して探検のつもりで、そしたら、ここが気
に入っただけ。

秀和 じゃあ、もう降りよう。

まさ子 ねえ、夜までここに居ましょう。

秀和 暑いよ。夜になったら、涼しくなったらまた来ればいいんだよ。

まさ子 部屋にもどって何するの。また私の身体いじくるの。

秀和 しないよ。

まさ子 するくせに。

秀和 しないよ。

まさ子 やってよ。いいわよ。他にすることナイんだもん。

秀和 (時計を見て) 少し早いけど、晩飯食いに行くか。(話題を何とか逸らした)

まさ子 ねえ、ここでしょうか。グッドアイデアでしょ。

秀和 何を言ってるんだよ。

まさ子 トタン、熱いわね。？

秀和 だろ。

まさ子 触ってみてよ。

秀和 (手で触れてみる) 熱いよ。

まさ子 ここで抱き合ったら、灼熱の愛ね。私ってバカだと思う。

秀和 さあ、行こう。

まさ子 きつと思いい出に残るぜ、きみ。

秀和 何が？

まさ子 ここでしたらよ。

秀和 しないって。

まさ子 あなた、私以外に何人とした？

秀和 そんなには、

まさ子 知ってた？私ね、梅毒でエイズキャリアよ。

秀和 馬鹿なことやってんじやないよ。

まさ子 ふふ。どうかな。ほんとなんだけどな。

秀和 もう行くぞ、俺。(歩き出す)

まさ子 (ついて行くが、急に振り返って)あの川って運河でしょ。

秀和 (応えない)

二人、去った。

運河を船が行く音が遠くに聞こえる。エンジンと甲高い汽笛だ。

と男が二人、姿を見せる。

片一方は大工道具の箱を持っている。こちらが大屋の息子で、やや大人しい感じ。

その後にポケット手についてきたのが、アパートの住人。

大屋の息子 どの辺になりますかね？

住人 どの辺たって目黒さん、あんた大屋なんだから、ワカルでしょ。

目黒 島田さんこそ、自分の部屋でしょ。

島田 だいたい、この辺じゃあ、ないかな。

目黒 この辺。

島田 そうそう。どっか穴、あるでしょ。

目黒 穴か。ないなあ、そんなもの。

島田 だって、漏れるんだから、きっと穴が開いてるのに決まってるんだから。

目黒 いつからですか。

島田 何が？

目黒 ですから、雨漏りですよ。

島田 もうずっとよ。梅雨の時、少しそうかなあと思ってたら、最近じゃあ雨が降るたん

びに雨漏り。

目黒 雨が降る度ですか。

島田 そう、今日みたいに晴れてる日は何ともないんだけどね。

目黒 当たり前ですよ。

島田 穴、ない？

目黒 ないなあ。

島田 ねえ、お宅の嫁さんさあ。

目黒 (穴を捜しながら) ええ。

島田 いや、何でもないけどさ。ねえ、もっとよくみてよ。

目黒 いやあ、トタンが熱いんだ。焼けちゃってんだ。

島田 暑いなあ。

目黒 あなたも捜して下さいよ。

島田 はいはい。

目黒 (穴をさがしながら) うちの富子が何か。

島田 えっ、

目黒 さっき、言いかけたでしょ。

島田 ああ、そうでしたっけ。

目黒 富子、どうかしましたか。

島田 幾つ、お歳。

目黒 三十五かな。

島田 赤ちゃんは。

目黒 六カ月。

島田 あんたの子。

目黒 当たり前でしょ。

島田 ふーん。

目黒 どうしてですか。

島田 いや、俺の子供かなと思って。

目黒 (穴を捜すのはやめて) 島田さん、そういう冗談、僕嫌いだな。

島田 いやいや、ほんとに冗談ですけどね。何かさ、あの赤ちゃん、目黒さんにちっとも似てないじゃない。

目黒 だって、六カ月だもん、まだ。

島田 六カ月だって三カ月だって、子供は親に似るよ。

目黒 富子に似てるんじゃないの。(また穴捜しだ)

島田 目黒さんはずっとこの管理人？

目黒 いや、サラリーマンを五年ばかりしたかな。

島田 辞めたの？

目黒 倒産。小さい印刷会社の営業やってたんですがね。穴なんてないなあ。まあ、いいんですよ。辞めようと思ってたんですから。

島田 いいよね、こういう不動産があつてさ。他にも持ってんでしょ、何軒か。

目黒 後ひとつだけ。

島田 悠々自適か。

目黒 他人さまが羨むほどのものでもないですよ。家賃収入なんて知れてるし、何だか、甲斐性なしに見られちゃって、肩身が狭くて。

島田 へーえ、だから富子さん、あんな仏頂面してるんだ。欲求不満か。

目黒 言いますね島田さん。

島田 いやいや、失敬。

目黒 あいつ、そんなに表情暗いですか？

島田 ああいうのに限って、夜は娼婦の顔になるんですよ。

目黒 そんなことあ、はは、あつ。

島田 ありました穴。

目黒 いや、これ、穴じゃなくて、トタンがこちら辺り浮いてるんですよ。釘が錆びちゃつて。それで漏るのかな。

島田 そうかな。

目黒 そうですよ、きつと。(金槌を出して、釘を口にくわえる) 打つときます。

島田 それでなおるかな？

目黒 ええ。きつと。

島田 (釘を手にして) 釘が短くありません？

目黒 それしかないから。いっぱい打っておきますから。

島田 (釘を放り投げた) お、ニュートン、ニュートン。

目黒 (打ちながら) え？

島田 いえ、万引の力ですよ。ニュートンの発見した万引。釘が空から地上へスーッと落ちるあれですよ。万引の力。

目黒 それ、あれかな、万有引力？

島田 そうそう。ともかく、ニュートンときてトン。へっへっへ。(また投げた)

目黒 島田さん、釘投げないで下さい。危ないですから。

島田 はいはい。こっから飛び下りて、足に釘が刺さったら痛いもんね。

目黒 そういうことじゃなくてね。

島田 ねえねえ、神田さんの部屋ってこの下辺りですよ。 (屋根を足で踏む)

目黒 さあ……

島田 今頃は、第二回戦かな。

目黒 何が。

島田 来てるでしょ、彼女が。さっきね、ドア越しに嬌声が聞こえてたんですよ。神田さんて秀和っていうんでしょう。神田秀和だなんて、何だか俳優の名前みたいだな。それでもてるのかな。

目黒 そうですか。彼女ですか。

島田 そうですかって、ふふ、しらばっくれて。知ってたんですよ。

目黒 いえ。

島田 ほんとは知ってて、時々こっそり覗いたりしてるんだろ。このお、大屋の特権が

あ！ (目黒の背中を強く叩いた) ひひひ。

目黒 うっ。(釘を飲んでしまったらしい)

島田 どうしました？

目黒 釘。

島田 釘って。

目黒 釘が。オエ、オエツ。

島田 飲んだの。

目黒 はい。喉ところに引っ掛かって。

島田 (口を覗いてみる) ああ、あるある。ちょっと待ってよ。ねえ、ラジオペンチか何かない。

目黒 あうあう。(道具箱を指差す)

島田 (探す) 無いよ、そんなの。(捜しながら) ちょっと待ってよ。遠山さんなら持つてると思うから。だって、あの人アクセサリーの製造販売やってるでしょ。ほら、個人貿易とかで。

目黒 どーでもいいですから、早く。早くしないと、入っていつちゃう。

島田 借りてくるから。あ、いいもんがあった。(U字磁石を見つけた) これ、喉にあてていてよ。(急いで去った)

目黒 (U字磁石を喉に当てた)

中年の女が物干し台に上がってきた。

女 まあ、ここも暑いわね。どこもかしこも暑いこと。(目黒をみつめて) あら、目黒さん、何してらっしゃるの?・・そうそう、ねえ大屋さん、部屋の電気、あれ上げて下さらないかしら。何ていうの電圧じゃなくて、ワットだったかしらアンペアだったかしら。今だとエアコンが安く買えるのよ。だけど、今の電気だと、ヒューズがすぐに飛ぶって店の人が言うのよ。・・ねえ、何?それ、何やってんの。何かのおまじない。

目黒 (首を横に振る)

女 何それ。ただの馬鹿。私はいんだけどね、いえ、私もそりゃあ暑いのは嫌よ。でも私より猫のミイちゃんが、へばってるのよ。足なんかもうフラフラさせて。ねえ、それって磁石。どうされたの。やだわ、暑くて気を変になったの。(降りてきて) これよ。このトタン。この屋根のせいだわ。これ、普通の瓦にするとずいぶんましになるんじゃないかしら。(触ってみる) まあ、まだ熱い。日がもう落ちるのにまだ熱いなんて。ねえ、どうされたの。

目黒 (すでに口がきける状態ではないので、喉を指差す)

女 え、喉、喉に何かつまってるの。魚の骨。違う。何、分からないわね。背中叩いてあげましょうか。

目黒 (首を横に振る) うう、うう。

女 魚の骨だったら、御飯をこう、丸飲みしてね、飲み込んでしまうの。ああ、そうか、私、死んだお婆ちゃんから聞いたことがある。魚の骨が喉に刺さった時は屋根の上にあがって下を見るといいんだって。でも、それ、きっと迷信よ。ねえ、背中叩けば。

目黒 (涙ぐむ)

女 やったげようか。遠慮しなくていいのよ。

目黒 (拒否する)

女 (それでも背中をさすり始める) 猫のミイちゃんがね、時々詰まらせるのよ。あの猫、もう歳でしょ。それなのに、魚の骨なんてゴクンと飲んじゃうの。それで、オエオエってやるのよ。そういう時はこうやってさすってやって、それからこうよ。(叩く) トンツ、さあ、どうだ。

目黒 飲んだ。飲んじやった。

女 ほら、もういいでしょ。ねえ、これでいつも成功するんだから。どう？スッキリしたでしょ。

目黒 三沢さん、ぼ、僕が飲んだのは魚の骨じゃナイんです。釘なんです。

三沢 釘。何よ、釘って。

目黒 この釘です。

三沢 こんなもの食べてたの？

目黒 違いますよ。ですからね、屋根の修理してたんですよ。

三沢 あら、嫌だ。釘なんて飲んじゃ駄目じゃない。

目黒 だって、背中叩くんだもん。(泣く)

三沢 まあ、どうしましょ。

島田が遠山とかいう男を連れてもどってきた。

島田 目黒さん、遠山さん連れてきたからもう大丈夫ですよ。

遠山 どうしました？釘、まだ喉のところにありますか？

三沢 えーと、じゃあ、私はこれで・・・あの、アンペアあげてくださいね。ミイちゃんが

ばてて困ってますから。(そそくさと帰ってしまう)

遠山 口開いて下さい。

目黒 駄目ですよ。もう飲んじやったから。

島田 磁石、駄目だったの。

目黒 飲んじやったんですから。

遠山 でも、とりあえず、アーンしてみてください。引っ掛かってたらこれで取れますから。

これ、特殊なペンチですから。喉の奥まで届きますから。

目黒 アーン。

遠山 (覗く)

島田 どう？

遠山 ああ、こりゃ駄目だ。姿形なし。

島田 あちゃあ。それじゃあ、今頃は胃袋か。

遠山 どれくらいの釘ですか？

目黒 こんくらい。

遠山 あんまり大きくはないですね。うまくすれば大便と一緒に出るかも知れませんが、

下手すりや胃に刺さって開腹手術だな。

目黒 開腹手術ってお腹、切るんですか。

島田 すいません。悪気はなかったんですよ。

目黒 もういいですよ。運が悪かったんだから。

遠山 医者に行ったほうがいいですね。

目黒 もちろん、行きます。

島田 とりあえずどうでしょう。お腹に磁石あてとけば。

遠山 この程度の磁石じゃねえ。

目黒 やっぱり医者へ行ってきました。

遠山 ええ、レントゲン撮ってもらった方がいいですよ。

目黒 あの、屋根の修理お願いできますか。

島田 やりますよ。それくらいやりますから。

目黒 じゃあ、ちょっとすいません。(慌てて去っていく)

島田 やれやれ、目黒さんもついてないなあ。とんだ災難だ。

遠山 あなたでしょ、原因は。

島田 あ、そうでした。ははは。

遠山 笑いごとじゃないですよ。

島田 そうですね。そうだな。まあ、しかし、わざとじゃないし。えーと、屋根なおそう

かな。金槌は、ああ、これか。で、何処だっけかな、浮いてるのは・・・と。

遠山 雨漏りするんですか？

島田 そうなんですよ。あ、ここか。ひどい雨漏りなんですよ。

遠山 そうですか。島田さんの部屋もそうなのか。いや、僕んところも時々漏るんです。

それで一度言おうと思ってたんです。

島田 (打ちながら) ええ？それ、変じゃないですか。

遠山 え？なんで。

島田 (打つのをやめた) だって、遠山さんところ一階でしょ。

遠山 そうですね。変だな。

島田 それね、洗濯機の水ですよ。上、誰ですか。

遠山 神田さんですが。

島田 じゃあ、きっと排水だ。最近神田さんところ・・・今日もなんだけど、女が来るで

しよ。そうすると、洗濯するのよね。それが、また雑な洗濯なんですよ。それで水を

ダッパダッパ使って、それが廊下に零れるんですよ。そいで遠山ところに漏るんですよ。きつとそうですよ。

遠山 そうか。洗濯排水か。・・・で、今日も来てるの？彼女。

島田 来てますよ。先程、一戦終わったところ。(また打ち始める)

遠山 それって、前の早苗さんとかいう女性？

島田 (首を振る) ううん。違いますよ。あのね、今度はまさ子。

遠山 まさ子さん。へーえ、よく知ってますね。

島田 地獄耳。・・・なんだか、上手くいかないなあ。トタン自体がもう駄目なんじゃないのかな。だいぶんに、錆びてますよ。

遠山 代わりましょうか。

島田 すんません、そうしてくれませんか。私、不器用なもんですから。

遠山 (代わって釘を打つ) こりやあ、やっぱ張り替えたほうがいいなあ。

島田 嫁とトタン屋根は新しいほうがいいか。ああ、そうそう、ねえ遠山さん、知ってます。

遠山 え、

島田 目黒さんの嫁さん。

遠山 富子さん。

島田 はいはい。あのね、内緒で神田さんの部屋にちよくちよく通ってるんですよ。

遠山 ええ！

島田 知らなかったでしょ。あの赤ん坊だって、目黒さんの子供だかどうだか、ワカッタもんじゃないんだから。

遠山 島田さん、それ、あんまり人に言わないほうがいいですよ。

島田 がってん承知ですよ。ああ、私、ちよっと目黒さんの様子、見て来ます。後、いいですか。

遠山 いいですよ。

島田、去った。

入れ代わりに秀和が上がってきた。

秀和 まさ子、いないのか。

遠山 (会釈する)

秀和 こんちわ。あの、女、来ませんでした。

遠山 いいえ。

秀和 そうですか。・・何処、行っちゃったかな。すぐにいなくなるんだから、変な女。

遠山 まさ子さんておっしゃるんですか。

秀和 ええ。

遠山 恋人ですね。

秀和 ええ、まあ、そんなとこ。さっきもね、急に部屋からいなくなって、そこんどこ、

屋根の端っこに座ってるんですよ。変なやつなんです。今も、洗濯機かけたまま、またいなくなっちゃって。

遠山 洗濯してるんですか？

秀和 ええ、何か。

遠山 いえ。

秀和 そこ、雨漏りでもするんですか。

遠山 らしいんです。島田さんのところなんですが。

秀和 へーえ、(屋根に降りてきて)僕んところこの辺りだけど、良かったら、ここも修繕してもらえます。

遠山 神田さんところもするんですか。

秀和 雨漏り。

遠山 はい。

秀和 しないよ。

遠山 はっ、

秀和 しないけど、したら困るから、修繕。変ですか。

遠山 転ばぬ先の杖ですね。

秀和 そうそう。コブラが先に付いた杖。このあいだ見ましたよ。

遠山 何を。

秀和 だから、ステッキでね、手で持つところがコブラになってるやつ。で、何なの？それと修繕と関係あるんですか。

遠山 いえ、まあ、ついでだから、やります。

秀和 すんませんね、どうも。でも、何で遠山さんが屋根修理なんか？そういうことは目黒さんがやればいいんじゃないの。

遠山 いや、それがね、最初はそうだったんですよ。島田さんが雨漏りするからっ

て、目黒さんに頼んで、目黒さんが島田さんとここで修繕してたら、島田さんが、目黒さんの背中叩いて、釘飲んで、島田さんが僕んところへ来て、目黒さん飲んだって
いうから、僕来たら、もう飲んでて、そいで降りて行って、島田さんも降りて、僕に
頼んで、ああ、そのままに島田さんがやってたんだけど、結局僕ですよ。

秀和・遠山 （黙ってみやっている）

秀和 いや、いいですよ。そういう経緯はどうでもいいですから。

遠山 ですから、釘ですよ。飲んじゃったんです。

秀和 島田さん？

遠山 いや、大屋さん。目黒さん。

秀和 あっそう。ふーん。

遠山 ……。

秀和 ……。

遠山 いるんですねえ。

秀和 え？誰？

遠山 コブラの杖。

秀和 コブラの杖って。

遠山 見たんでしょ。

秀和 ああ、杖ね。ええ。こおんな格好してるやつですよ。

遠山 （屋根を移動して） 神田さんところこの辺ですか？

秀和 そうです。

遠山 一応、釘、打っておきます。

秀和 ええ、そうして下さい。

と、富子が若い男女を連れて、登場。

富子 ここが物干し台ですけど。

男 うわあ、結構見晴らしいじゃん。あれ運河だ。

女 え？どれ？

男 あれ。

女 あ、ほんとだ。

男 船だ。

女 ほんとだ。

富子 (秀和を見て、睨む)

秀和 (会釈して顔を背ける)

遠山 こんちは。

富子 (知らん顔、じっと秀和を睨んでいる)

女 でも、暑いわねここ。

男 そうね、ちよつと暑いね。

女 これ、西日でしょ。

男 えーと、方角からすると。

女 方角って、今の時間に照りつけてるのは西日に決まってるじゃん。

男 そうだね。西日だ。

女 ここ、トタン屋根ね。

男 そうだね。

女 ねえ、降りて歩いてもいいですか？

富子 どうぞ。

男 気をつけなよ。

ふたりして屋根に降りる。

女 まあ、温かい。

男 ほんとだ。

女 変な感じ。

男 砂漠だなあ。

女 何が。

男 熱いから、足の裏が。

女 砂漠行ったことあんの。

男 ないけど、想像だよ。

女 (遠山に) 修繕ですか。

遠山 ええ。

秀和 雨漏りの予防ですよ。お宅さんたち、入居ですか。

男 はい。

秀和 ここね、見栄えは良くないけど、住んでみると結構いいですよ。

男 そうですか。

秀和 交通の便がいいんです。ね、遠山さん。

遠山 ええ。バスも地下鉄もすぐだし。

秀和 家賃が今時珍しく安いんですよ。(チラッと富子を見た)

富子 (不機嫌に視線を逸らした)

男 決めようか。

女 やっぱりやめるわ私。

男 え、やめんの？

女 うん。

男 どして？

女 だって、やっぱり何だかやだもん。

男 ここ、地の利はいいんだけどなあ。安いし。

女 何か、ビンボ臭そうだし。

男 だけど、贅沢いえないよ。

女 交通が不便でもマンションのほうがいい。

男 そんな高価いところ無理だって。

女 だって、雨漏りするの嫌よ。

秀和 いや、しないでですよ。これは予防でやってるだけだから。

女 帰りましょ。

男 そうだね。

ふたり、去って行った。

富子もその後をついていく。

秀和 今時の若者は贅沢だなあ。金なんかナイくせに。

遠山 でも、このトタン屋根は貼りなおしてもらったほうがいいな。

秀和 そうですよね。(と、運河の方を見て) あれ？

遠山 え？

秀和 いや、あれ、まさ子じゃないかな。あの運河の堤防。

遠山 そうなんですか。

秀和 変な女だなあ。あんなところで何してるんだろ。洗濯機かけっぱなしで。

遠山 あの神田さん。

秀和 はい？

遠山 洗濯機なんですけど。

秀和 ああ、音でしょ。うるさいんです。古いから。もうすぐ今度のボーナスで買い替え
ますから。(運河のまさ子のことが気掛かりらしい) ああ、もう世話が焼ける女だなあ。
どうすつかなあ。放っておくか。

遠山 結婚されるんですか？

秀和 いや、分からないですよ、そういうことは。

遠山 神田さんもてるから。

秀和 もてませんよ。

遠山 島田さん、言ってみましたよ。

秀和 あの人はいい加減なことしか言わないから。

遠山 でも、前の、ほら、早苗って人とは違うんでしょ。

秀和 ああ、早苗はもう別の男と結婚しました。

遠山 いいですねえ、次がすぐに見つかるから。

秀和 遠山さんは、あれですか、もう結婚は嫌ですか。

遠山 いや、そうでもないんですけど、ここにいるとね、どうしても死んだ女房のことが
忘れられなくて。

秀和 どうして出ていかないんです。

遠山 未練なんじゃないですか。

秀和 結局、あれってただの事故でしょ。

遠山 ええ。洗濯物が飛んだのを拾おうとして足滑らしたらしいですね。

秀和 操をたててるんですね、それから。

遠山 そんなきれいな身の上でもないですが。

秀和 やっぱり適当に遊んでる。

遠山 いや、そうでもないけど。

秀和 俺の親父が好きでねえ。やっぱり血は争えないのかなあ。俺はもう親父のことは許
してるんですけど、妹は未だに憎んでますね。仲悪いですよ。やっぱり女はそうなの
かなあ。でもね、これだけは言わせてもらいたいですけど、俺なんか、遊んだこと
ないですよ。みんな真面目ですよ。全部本気なんです。ほら、よく家庭ではいいお父

さんしてるけど、アジア旅行のツアーなんかで遊んでくる人いるでしょ。俺はあいののは出来ないし、許せないですよ。俺の親父だって、三回離婚してるけど、離婚してるってことは、それぞれ本気だったっていうことですよ。困ったりもしてないんだから。

遠山 さて、私、もどります。

秀和 ああ、すんませんね。他人の屋根の修繕までやらせて。

遠山 他人たつて、同じアパートですから。じゃあ、失礼。

秀和 はい。ああ、

遠山 え？

秀和 今晚、花火でしょ。

遠山 向こう岸。

秀和 はい。

遠山 そうか、暑気納めの花火、今夜か。

秀和 またここで見物します。

遠山 ええ、

秀和 じゃあ、夜、また。

遠山 はい。

遠山、去った。秀和は苦々しく、運河の方を見ている。

と、富子がまた姿を現して、

秀和 え、あの、どうかしました。

富子 (つかつかと秀和に近づいて、抱きついた。というよりしがみついた)

秀和 何だ。何なの。おい、よせよ。

富子 いや、いやっ

秀和 やめろよ。

富子 (さらに激しく)

秀和 やめなさいってば。

と、物干し台に姿を現したのはまさ子だ。

まさ子 何してるの？

秀和 あ、まさ子、お前、運河のほうにいたんじゃないのか？

まさ子 寝惚けてんじゃないわよ。

秀和 (運河を見て) じゃあ、あれ、お前じゃないんだ。

まさ子 どうでもいいけど、心中する気？落ちるわよ。

秀和 いや、これはな、何でもない。

まさ子 何でもないかどうか、見りゃわかるわよ。

秀和 ち、ちよつと富子さん、離して下さい。

富子 いや、いや、いやあああつ。

冷やかに見つめるまさ子。しがみついている富子。困った秀和。

溶暗。

2

アパートの住人たちが、それぞれ缶ビールやらジュース片手にトタン屋根から運河の向こう岸の花火を見物している。

島田 お、また上がった。今度は大きそう。

炸裂。歓声。

三沢 ねえ、今年は何だか少ないんじゃない？(もうずいぶんと酩酊しているようだ) 去年なんか、もつとボンボン上がったじゃない。バーン、ドカーン、ピカドーン。

島田 予算がないんだナ。

目黒 不況にてはじける花火の数少なし。

島田 それ何ですか。俳句ですか、川柳ですか。

目黒 いえ、そんなじゃないですよ。言ってみただけです。

遠山 大屋さん、お腹はいいんですか、釘。

目黒 お腹じゃなかったんですよ。ここんどこ。このね、食道の辺りに刺さってたんですよ。それを、ほら、何ていうんですか？スコープですか、あの胃カメラで見ながら抜

いてもらったんですよ。

遠山 良かったですね、切らずにすんで。

目黒 ええ、もう不幸中の幸いです。

三沢 上がったっ。

炸裂。歓声。

三沢 やっぱりシケてるわ。何か小さいもの。もっとデカイのこなきや、デカチンチン来い。

秀和 もうすぐ連発で上げるんじゃないかな。

まさ子 つまんないわ。

秀和 えっ。

まさ子 つまんない。あれじゃあ、死ねないわ。

秀和 死ぬって何。

まさ子 言うでしょ。花火のようにパツと散るって。あんなのじゃ、散れないんじゃないの。何だかズルズルと射精してるみたい。

秀和 お前ねえ、そういう表現やめろよ。

島田 いやあ、ユニークですよ。どうです、一杯いきましよう。(近寄ってきて、手にしていた紙コップを渡して、ビールを注いだ)

まさ子 (一息で飲んで) ごちそうさま。

島田 いやあ、豪傑だなあ。

秀和 おい、無理すんなよ。

三沢 (ウイスキーを片手に近寄ってきて) ねえ、こっちはどう? バーボンよ。まさ子 いただきます。

秀和 おい、大丈夫か。

三沢 大丈夫よ。いいからいいから。グツといこう。グツと。

島田 あ、上がった。今度は連発だ。

炸裂。歓声。

島田 おおっと、ドンドンくるぞ。

三沢 よつ、景気いいぞ。いけいけいけえつ。(と、扇子を拵げてアップレ)
遠山 最後の連発ですね。これで今年はお終いかな。

次々と炸裂して、終息する。

遠山 終わったみたいですね。

まさ子 あ、仕掛け花火。

秀和 あれな、ナイアガラって言うんだ。

島田 あれが始まるともうお終いなんだよな。

三沢 もうお終いかあ。

まさ子 綺麗ねあれ。

島田 ああ、消えてく、消えてく。

まさ子 終わっちゃった。何か淋しい。

人々は引き上げる。

島田 ねえ、神田さん、僕の部屋で飲み直しませんか。いい酒あるんですよ。

秀和 いえ、

まさ子 いいわ、行きましょ。私、飲む。

秀和 お前、ずいぶん飲んでるよ。

まさ子 大丈夫よ。えーと、

島田 島田です。

まさ子 行きましょ。島田さん。

島田とまさ子が歩き出したので、不承不承ながら、秀和も後に続いた。

秀和 島田さん、僕の部屋にしてくれませんか。

島田 え？どうして？

秀和 こいつ酔っぱらうと、連れて帰るのが面倒なんです。寝ちまいますから。

島田 いいですよ。酒、持っていきますから。

三人去って、屋根の上は三沢と遠山だけ。

三沢 どしたの、遠山さん。思い出してるの。

遠山 え？何をですか？

三沢 奥さんのこと。

遠山 いやあ、そうじゃ、

三沢 隠しても分かるわよ。去年はここに良子さんがいて、一緒に花火見たもんね。そうよ、ここんところに二人仲良く座ってたもんね。

と、その良子らしい女性が現れて、屋根の上に座る。三沢はウイスキーを片手に、退く。

遠山 終わったのかな花火。

良子 そうね。

遠山 もどろうか。

良子 嫌ねえ。

遠山 え？何が。

良子 花火って何だか終わると淋しくて。

遠山 そうだね。一瞬だもんな。

良子 私、あんなふうには死にたくないな。

遠山 僕だってあれは嫌だな。

良子 でも、男の人ってああいうの格好いいと思ってるんでしょ？

遠山 そんなことないよ。僕はどっちかといえば、地道に生きてかさかさに枯れて、それで空気のように死んでいきたい方だな。

良子 私はどういふふうにして死のうかな。

遠山 おいおい、何を言い出すんだよ。

良子 暗い空に花が咲いて、あつというまにまた暗い空。人間の一生なんて、時間にしたら花火みたいなものなのね。生まれる前に闇があつて、ちよつと生まれて、それから死んでしまうとまた永遠の闇で。(やや間があつて) 私怖いわ。

遠山 何が。

良子 死ぬのが怖い。

遠山 僕だって怖いよ。誰だってそうだろう。

良子 ねえ、死ぬってどれくらいの時間なの。

遠山 え、

良子 生きてるのは八十年でしょ。死ぬのは何年？ねえ、永遠って百万年よりも一兆年よりももっと長いんでしょ。

遠山 そりゃ、永遠だからな。

良子 その間、ずっと死んでるのね。怖いわ。もう二度と生まれてこないんでしょ。永遠に死ぬのに、何でたかだか八十年ばかり生きるために、人間ってあくせくするんでしょ。

遠山 それは、もう、哲学だね。

良子 でも、良かったわ、あなたと会えて。もし、生きてる間に、愛することができると会えなかったら、ずっと死んでいると同じね。

遠山 おいおい、哲学からいきなりラブ・ストーリーかい。

良子 ねえ、私が死ぬ時は、私のこと見ててね。

遠山 縁起でもないこと言うんじゃないよ。僕たちはこれから一生懸命に生きるんだから。まだ始まったばかりなんだから。

良子 ねえ、一つだけ約束してくれない？

遠山 何を？

良子 私のこと嫌いになったらハッキリ言ってね。お願いだから愛してるふりだけはしないで頂戴。

遠山 ああ。

良子 へへ、気障なこと言っちゃった。今のはね、去年見た映画の中で女が男に言うせりふよ。

遠山 へーえ、そうだったっけ。

良子 そうよ。そう言った後でその女の人は自殺するの。

遠山 変だな、俺、見てないな、そんな映画。

良子 私、死にたくない。

良子、立ち上がると闇の向こうに去って行く。

三沢 ねえ遠山さん。私ね、変だなんて思ってることが一つだけあるのよ。

遠山 何ですか？

三沢 洗濯物よ。

遠山 洗濯物？

三沢 そう。

遠山 洗濯物が何か？

三沢 あの日ね、洗濯物干しに良子さん、ここが上がって来たんですよ。

遠山 あいつがここから落ちた日ですか。

三沢 そう。

遠山 それが何か変なんですか？

三沢 私ね、みんなが下で騒いでる時、ここが上がって来たのよ。猫が飛び出したもんだから。そうしたら、洗濯物が干してあったわ。でも、あれ、良子さんが干した物じゃなかったような気がするの。

遠山 うちの洗濯物でしょ。

三沢 干し方よ。良子さん、あんなぞんざいな干し方しないわ。

遠山 ということなんです。

三沢 遠山さん、私、酔っぱらってるから言ってしまうけど、ごめんね。瘤に触ったら許して頂戴よ。あのね、良子さんと神田さん、噂あったのよ。

遠山 何ですか、それは。

三沢 根も葉もない噂よ。ほんとうに根も葉もないひもふもナイへもほもナイのよ。

遠山 それと、あいつの事故と何か、関係あるんですか。

三沢 分からないわよ。私、そんなに利口じゃないから。ただね、勘がね、働くの。妙なよ。

遠山 事故じゃないっていうんですか。

三沢 ああ、もうやめましょ。やめた。やくめたつと。(去った)

釈然としない遠山。考え込むようにして腕を組んだ。と、神田が現れた。

秀和 (缶ビールをぐいっと飲んで、屋根の上に腰を下ろした。遠山に気がついて) 何だ、

遠山さん、まだいたんですか？

遠山 ええ。ここが一番涼しいですから。

秀和 そうですね。

遠山 まさ子さんは？

秀和 島田さんと飲んでますよ。島田さんは調子がいいから。それに、

遠山 え？

秀和 いや、どうでもいいんですが。ねえ、遠山さん、

遠山 え？

秀和 あなた、恋愛妄想って信じます？

遠山 恋愛妄想？何ですかそれは。

秀和 例えばですね、ある女がいて、ある男と恋愛してるって思い込んでしまう病気ですよ。

遠山 精神病ですか。

秀和 ワカラナイけど。

遠山 それが、どうかしたんですか。

秀和 大屋の嫁さんね、

遠山 はい、目黒さんの、富子さん。

秀和 あれ、どうもその気があるんですよ。

遠山 ええ、ほんとですか。知らなかったな。で、相手は？

秀和 僕ですよ。

遠山 ええっ神田さんですか。

秀和 今日、まさ子に見られちゃったんです。富子さんが僕に抱きついてきたんです。それからまさ子のやつ機嫌が悪くって。

遠山 そりゃ、大変ですね。

秀和 はい。ここ、出ようかなあ。

遠山 本当なら、そうしたほうがいいんじゃないですか。

秀和 本当ならって、僕が嘘ついてると思ってるんですか。

遠山 いや、そういうことじゃなくて。

と、物干し台に女がいて、

女 嘘よ。

と、言う。

遠山・秀和 えっ、

女 嘘ばっかり。

秀和 (狼狽する) と、富子さん。

女 ゆり子よ。

秀和 ゆり子。

ゆり子 自分の妹の名前、忘れたの。

秀和 何だ、ゆり子じゃないか。どうしたんだ。

ゆり子 呼んだのはそっちでしょ。

秀和 ここにいるって、よく分かったな。

ゆり子 聞いてきたわ。ベロベロに酔っぱらっている女の人にね。何なのあの女、新しい

彼女なの、いい気なもんね、兄さんの部屋で他の男といちゃついて。キスしてたわ。

秀和 何だと、ちっ、島田のやつ。

ゆり子 帰ったわよ、男は。私が訪ねていったから。

秀和 (座る) そ、そうか。

ゆり子 お金、用意してきたわ。

秀和 ああ、すまん。

ゆり子 ほんとに、父さんそっくりね。女のことを金で解決するところなんて、まったく

一緒ね。

秀和 (遠山をうかがって) 部屋行って話そう。

ゆり子 いい。私、帰るから。お金ここへ置いておくわ。

秀和 何て言ってた？

ゆり子 母さん？

秀和 ああ。

ゆり子 どうでもいいでしょ。

秀和 金は、必ず返すから、そう言っておいてくれ。

ゆり子 宛にしないわ。

秀和 (遠山に) へへ、ちよっとごたついちゃって。へへへ。

ゆり子 私ね、大屋さんに会ってきたわ。富子さんというの。

秀和 何で。

ゆり子 富子さんが話があるっていうんだもの、仕方無いでしょ。兄さん、いい加減にし

てよね、人の奥さんに手出したりして。

秀和 え、いや、それは違うんだ。今も遠山さんと、あのこの方、遠山さん。

遠山 遠山です。神田さんにはお世話になってます。

秀和 その、あの、それを話してただけど、それは違うんだ。

ゆり子 誰が兄さんの話なんて信じるもんですか。

秀和 いや、違うんだ。

ゆり子 もういいいわよどうでも。そうやっていい加減に生きて、父さんみたいに野垂れ死にすればいいわ。

秀和 (諦めて) そうか。じゃあ、まあいい。もう何も言わないよ。

ゆり子 それからね、兄さん。私今度結婚することにしたの。

秀和 それはおめでどう。

ゆり子 真面目な人よ。仕事一筋の人。もちろん兄さんは結婚式には招待しないけど、いいわね。

秀和 そうなのか。

ゆり子 あたりまえでしょ。じゃあ、私、帰る。さよなら。これっきりにしてね。

去った。

秀和 俺やあいつの親父だって、仕事一筋で真面目な男だったですよ。ただ、女にも真面目だったんですよ。その親父が死んで、親父に向けられていた憎しみ全部、こっちへきたってとこですかね。(溜め息) この金は女とのゴタゴタじゃないんです。同僚が会社の金を使い込んで、その穴埋めを、見るにみかねてしてやるんです。まあ、そんなこと言っても信じてくれないでしょうけど。

遠山 いえ、人それぞれ、他人には言えない事情っていうやつ、あるでしょうから。

秀和 そうですか、ありがとうございます。

遠山 あの、

秀和 え？

遠山 神田さんのこと信用して訊くんですけど？

秀和 何ですか？やだなあ、そういうあらたまりかたされちゃあ、気味が悪いですよ。

遠山 うちの良子と、神田さん、噂があったんですか？

秀和 (遠山をじっと見つめて) 遠山さん、

遠山 はい。

秀和 信じてもらえますか。

遠山 ええ。

秀和 噂はあつたんです。

遠山 やっぱり。

秀和 私、良子さんに誘われて、映画を見に行ったこともあります。

遠山 あの、ひよつとして、それって、女が自殺する映画ですか。

秀和 ？・・・ええ、そうだったかも知れませんが、何で良子さんが私なんか誘ったのか、

それはもう、分からないことなんです、噂になるようなことはそれ以外、まったくありません。それ以上のことは何もないんです。

遠山 そうですか。いや、ありがとう。すいませんでした。

秀和 よろしいですか？

遠山 ええ。去年、仕事の目鼻がつくつかないかって時期があつて、あいつのことを放つたらかしにしていたこと、思い出しました。

秀和 そういえば、その頃からでした。

遠山 えっ、何がです。

秀和 富子さんですよ。

遠山 そうですか。

秀和 何が不服で、あんなふうに狂ってしまうんだろうなあ。

遠山 いいご主人なのに。

秀和 女は分かります。

遠山 (笑って) いや、すいません。神田さんからそんな言葉聞くとは思ってませんでしたが。いや、すいません。

秀和 ほんとに、何をしでかすか、ワカッタもんじゃありませんよ。

ふたり、運河を見るときもなく見ている。

溶暗

朝。

まさ子がまた屋根の隅にしゃがんでいる。

物干し台に富子が姿を見せた。

まさ子 (人の気配は察したが、そちらは見ないで) 誰? 秀和さん、早いわね。もっと寝てたら。トタン、まだ冷たいわ。これから、また熱くなるのかしら。

富子 (ゆっくりまさ子に近づいていく)

まさ子 私、ここに住もうかな。・・ふふ、嘘よ。

富子 (さらに近づいて)

まさ子 (振り向いた) 何、あなた?

富子 (あきらかに、まさ子を突き落とすつもりだ)

まさ子 何すんの。やめてよ。

富子 (ジリッとまさ子に寄った)

と、「やめなさいっ」という声。物干し台に三沢がいる。

三沢 今度は洗濯物はないわよっ。良子さんのときみたいに誤魔化せないわよ!

富子 いやっ、嫌っ、いやあっつ。(走り去った)

まさ子 どうしたの、あの人。

三沢 あなたを突き落とそうとしたのよ。

まさ子 それは分かったけど、何で。

三沢 さあ。

まさ子 ひよっとして、秀和さんとあの人。

三沢 私は知らないわ。ああ、もいい。見なかったことにしておこう。

まさ子 ねえ、あなた、さつき良子さんの時みたいになっていかなかった。

三沢 さあ、知らないわよ。まったく、男と女なんてろくでもないんだから。ああ、馬鹿

馬鹿しい。

まさ子 良子さんて誰。

三沢 遠山さんの奥さんだった人よ。ここから落ちて亡くなったの。

まさ子 まさか、あの女（ひと）がやったの。

三沢 事故よ。事故なの。私は何も知らないわよ。知りません。私は、猫が部屋を抜け出して、ここでよくウンチをするから、それで、今もここに来ただけ。私、時々思いつきで何か口走ったりするから、何も知らない。

まさ子 何だかよく分からないわ。

三沢 （何か小刻みに震えていたが、一気に心の底のものが吹き出たかのようにして）きつと、何でもないことなのよ。何を信じていればいいのかわカラナイから、ああだ、こうだと決めつけるのよ。柄にもなく刑事みたいなことをして、私がどうかしているだけ。真実が分かったからといって、それが何になるわけでなし。ただ、このトタン屋根のうえに重なりあった足跡みたいに、絡み合った人間が登場しては消えていくだけなのよ。そんなこと、私はどうに知ってるわ。だってもうこんなに歳をとっただもの。あなた、まさ子さんっていったわね。分かってるわ、あなたが神田さんを好きなの。あの男なら恋に失敗してたとえ自分が傷つこうと、痛くも痒くもないわ。あなたにとってわね。でも、どうしてかしら、なんでそんなロクデナシに惚れたのかしら。いいえ、あなたのことをいってるのじゃないのよ。私のことをいってるの。そうなのよ。私もあの富子さんと同じなの。私が心の中だけでやろうと思ったことを、あの富子さんは、実際にやってしまっただけなの。だから、私にはよくワカッタのよ。富子さんのやったことがよく分かったの。笑ってくれてもいいわ。私や富子さんのことを。でも、私がいまどんな生活をして、それが何の因果で、私の過去がどうだったかなんて聞かないで頂戴ね。私は私が思っているより馬鹿なだけなのよ。ロクデモナイ男に思いを寄せて、そんな自分を探偵や刑事のような真似で誤魔化してる、ただの歳をとった醜い女よ。

しばし、無言のふたり。三沢は肩で溜め息をつく。

まさ子 （ポツンと言う）私、ロクデナシ、好きよ。

運河の船が警笛をならした。それが、河を流れていって、消えた。

END

2
0
1
3
/
0
3
/
1
9